

I レンマとは何か

木岡伸夫（関西大学名誉教授）

ちょうど50年前に出版された山内得立『ロゴスとレンマ』（岩波書店、1974年）によって、私は「レンマ」の存在を知り、それが一種の「論理」であることを教えられました。15年前に遡るこの書との出会いから考えたことをまとめた拙著が、10年前に公刊した『〈あいだ〉を開く レンマの地平』（世界思想社、2014年）です。本日は、主にこの2冊を参照しながら、「I レンマとは何か」「II レンマと武道」の二部にわたって、お話したいと存じます。

1 レンマという論理

山内得立の遺業

山内得立（1890－1982）は、京都大学で西田幾多郎の下に西洋哲学を修めた後、戦前戦後にわたり、母校の教授として哲学を教えました。それだけなら、ふつうの哲学者のキャリアですが、本人は奈良県大和高田の真宗寺院出身、仏教の精神的雰囲気の中で育っています。そういう背景もあって、京大を退官した後、西洋哲学と仏教などの東洋思想とを総合する哲学の研究に着手しました。70代から80代を経て、92歳で没するまで、執筆をつづけ、その間に三冊の代表的著書を残しました。年代順に――

『意味の形而上学』岩波書店、1967年（77歳）。

『ロゴスとレンマ』岩波書店、1974年（84歳）。

『随眠の哲学』岩波書店、1993年（92歳で没、遺著）。

となります。この人の学問がいかなるものであったかは、末輩の私に語り尽くせる筋合いの話ではありませんが、あえて一言で要約するなら、東西の哲学を総合する「日本の哲学」を立ち上げようとして、ある程度までそれに成功した人、ということになるでしょう。「日本の哲学」とは、明治期に日本に入ってきた西洋の「哲学」（philosophy）と、それ以前から日本に存在する精神的伝統とを前にして、どちらか一方をよしとして他を切り捨てることなく、双方のとるべき長所を活かした総合的な哲学、日本人でなければつくることのできない新しい哲学、を意味します。明治以後、最初に「日本の哲学」に取り組んだ人は、西田幾多郎（1870－1945）。パイオニアたる師の影を踏みながら、弟子の山内が心にかけて第一の課題は、日本および東洋（インド、中国）の思想伝統に潜む「論理」に具体的な形を与えること、それをつうじて東西の哲学（論理）を総合するという企てでした。その東洋的な論理

の形として具体化されたものが、本日のテーマである「レンマ」なのです。

ロゴスとレンマ

『ロゴスとレンマ』の中で、哲学の論理は「ロゴス」と「レンマ」の二種であると説明されています。「ロゴス」は、西洋の哲学全般がそれに従っている思考の形式です。それを規則として表すと、「AはAである」という同一律、「AとAでないもの（非A）とは両立しない」という矛盾律、などの「形式論理」になります——形式論理の規則として、もう一つある「排中律」については、後述します。何だ、そんなことか、それなら小学生でも分かる、と言われるかもしれません。「小学生でも分かる」のは、明治になって、哲学と同時に入ってきた論理的思考（ロゴス）の影響です。日本人の思考が「論理的」になったのは、明治以後の近代的教育のおかげである、と言っても過言ではありません。

ギリシア語 *logos* のもとなる動詞は *legō*、中心となる意味は、「集める、数える、話す」。要するに、物事がゴチャゴチャしないように区別し、整理して話す言葉のはたらきが、ロゴスであり、そういう知的な思考が、ロゴスから生まれた「論理」(logic) を特徴づけます。さて、ロゴスと対比されるもう一つの論理が、レンマ。ギリシア語 *lemma* の動詞形 *lambanō* は、「つかむ」「とらえる」を意味します。山内は、レンマが「直観的な把握の仕方」(『ロゴスとレンマ』68頁) であり、そこに東洋的思惟の特徴があるとしています。

以上のことから、ひとまずロゴスは知的な思考、レンマは直観的な把握、として区別されることが明らかです。ロゴスは、まさしく論理そのもの。それに対して、レンマをもう一つの「論理」と呼ぶ理由が、どこにあるのでしょうか。それは、ロゴスを代表する思考規則、つまり形式論理の第三則「排中律」が示すように、ロゴスの論理は、二つのものを区別し分けることに有効であっても、分けられた二者の〈中間〉が説明できない、という弱点があるからです。Aと非Aとを区別しても、その中間が何かを説明できないという欠陥、これを補う思考として、レンマというもう一つの論理が要請される、と山内は考えます。西洋にはない中間的なものの思考が、東洋思想の伝統にはある。そういう東洋的な「中の論理」がレンマであるとして、山内はそれを西洋のロゴスに対比させたわけです。

中の論理

「排中律」とは、物事がA（肯定）か非A（否定）かのいずれかであって、Aと非Aとの中間はない、という考えです。そういう考えは、本質の異なる二つのものを区別する思想、哲学の世界で「二元論」と呼ばれる立場を生み出します。二元論を唱えた有名な哲学者デカルト（1596-1650）は、心と身体を根本的に区別する「心身二元論」を確立しました。心（精神）の本質は、「思考」の働き。対する身体は、一種の物体だから、その本質は「延長」であるとして、この二つを完全に切り離します。こういう考え方をすると、精神だか物体だか判らないようなもの、思考とも延長ともいえないようなものは、存在しないということになって、学問の世界から追放されます。すべては、精神（思考）か物体（延長）か、いずれか

であって、そのいずれでもないとか、いずれでもあるといったものは、考える必要がないことになるのです。そういう合理的な思考法をとることによって、近代科学とりわけ自然科学は飛躍的に発展します。ロゴスの論理は、近代科学の方法であるというだけではなく、私たちの日常生活に入り込んで、矛盾を許さない態度、生き方をつくりあげてきました。

合理的な論理を代表するロゴスは、〈中間〉を考えません。しかし私たちの生きる世界は、中間的であいまいな事象に充ちています——色で言えば、黒と白の中間に「灰色」があるように。たとえば、生と死の中間に位置する灰色のゾーンとして、「脳死」が挙げられる。従来の「心臓死」から言えば、脳死は（心臓が働いている以上）まだ人の死ではない。しかし、〈脳の死＝意識の消滅＝人の死〉とする死の観念からすれば、脳死は人の死であると言ってもよい、と考えられる。どちらの考えも、それなりに有力であることを認めれば、脳死は生と死の〈中間〉である、という言い方ができるでしょう。それは、生と死のいずれか、という問いに対して、生でもなく死でもない、生でもあり死でもある、といった、一見ゴマカシに聞こえる答えを引き出します。しかし、それはゴマカシではなく、そういう言い方でしか〈中間〉が説明できない、ということの意味します。山内得立の言い回しを引くなら、

中とはただ二つのものの中にあることをではなく、それが**二つのものの孰れでもなく**、そしてそれ故に**それらの孰れでもあり得る**ことを意味する（『〈あいだ〉を開く』30頁）。

二つのものの〈中間〉（あいだ）を、山内は次のように「テトラレンマ」（四つのレンマ）の論理形式で表しています。

- I A（肯定）
- II \bar{A} （否定）
- III Aでも \bar{A} でもない（肯定でもなく否定でもない＝両非）
- IV Aでも \bar{A} でもある（肯定でもあり否定でもある＝両是）

四つのレンマのうち、IとIIは、形式論理における〈肯定－否定〉がたがいに矛盾する「ジレンマ」の関係を表します——ジレンマの経験は、誰にでもよくあること。しかし、III（両非）とIV（両是）は、いったいどういうことを意味するのか。テトラレンマは、大乘仏教の祖師である龍樹（ナーガールジュナ、2世紀中～3世紀中？）の『中論』から、山内が想を得て作り出した定式です。ここでは抽象的な仏教の論理に立ち入ることを避けて、今日の私たちにとってレンマの論理が必要不可欠である理由を、レンマの妥当する領域を挙げることによって、明らかにしたいと考えます。ロゴスの論理、その典型としての二元論だけでは解決のできない問題領域が、数多くあるという事実には、気づいていただけるでしょう。

2 レンマの領域

「環境」の本質

現代、誰もが関心をもたざるをえない「環境」の問題。環境とは何か。英語の *environment* は、「周りを取り囲むあり方」、つまり〈中心〉と〈周囲〉との関係を表します。〈中心〉を占めるのは、人間や生物の主体。〈周囲〉は、中心の主体が働きかける客体で、ふつう「自然」を指します。主体と客体とを別のものとして分けるこの考え方は、「主客二元論」と呼ばれ、先に名を挙げたデカルトに由来する近代的な思考の立場です——「心身二元論」と「主客二元論」とは、同じ事実を違った角度から言い表したものです。

20 世紀の後半になって、環境に生じたさまざまな危機的状況に関して、主客二元論が環境破壊の元凶だという指摘が生じてきました。その理由は、自然という客体が、人間主体から独立した対象・モノとして、支配され利用されることから、乱開発・自然破壊・資源の枯渇ほか、さまざまなリスクのツケが、人間に回ってきたことにあります。このような現象が生じた根本原因として、〈主体－客体〉、〈人間－自然〉という二項対立の〈中間〉が見落とされ、無視されてきた事実を挙げることができます。環境には、人間と自然のどちらかではなく、どちらでもあるような、中間的なものが介在します。人間が自然に関係して生み出した〈文化〉は、そういうものです。二元論は、そういう中間的なものに注意を向けることなく、主客対立の関係に固執する。そのとき、環境は支配・利用される資源であるにすぎず、人間との〈共生〉関係を失うことになります。

拙著『〈あいだ〉を開く』の最大の眼目は、山内が提起したレンマ的な「中の論理」をテコにして、環境危機を克服する知恵を取り戻すことにあります——この狙いを察知した環境 NGO の代表者が、昨年 9 月に非常に行き届いた書評を發表してくれました（小林泰紘「人と自然の〈あいだ〉をめぐる」*Stanford SOCIAL INNOVATION Review Japan* 『コミュニティの声を聞く』*SSIR Japan*、2023 年 9 月）。自分として強調しておきたいのは、「環境」が自分から独立の客体ではなく、すでに自分との関係のうちにあるような自然、その意味で、〈おのれと一体の自然〉という意味をもつということです。そう言って、すぐに前言を修正して恐縮ですが、環境としての自然は、自身と一体であるというだけではありません。自然と私には、一体であると同時に、一体でない、という矛盾した関係があるのです。山内が参考にした龍樹の『中論』では、そういう関係を「不一不異」という二重否定の形で言い表しています。自然と私とは、同一の存在ではないけれども、かといって別々の存在でもない。人間と自然とが「同一である」ということもなければ、「同一でない」ということもない。テトラレンマのⅢ「両非」の関係は、そういうことを意味します。

いま、両非の第三レンマと言いましたが、人間と自然とは「同一である」とともに「同一でない」と言うなら、Ⅳの二重肯定（両是）の形式でも同じことではないか。そういう疑問が生じるかと思います。まさにそのとおりですが、山内は、二重否定の両非から二重肯定の両是へただちに転じるあり方を、大乘仏教本来の「即の論理」の譲れない一線として重視しました。難解なこの点に立ち入ることは、本日のセッションの目的から逸れることになりま

すので、割愛させていただきます。ここでは、環境というものが、主体と客体のいずれでもなく、いずれでもある〈中間〉、レンマの領域である、という指摘にとどめて、午前中は、本日の主題である武道とレンマとの結びつきに言及して終わりたいと存じます。

因果と縁起

『ロゴスとレンマ』「第五 縁起の構造」では、大乘仏教の「空」につうじる「縁起」の思想、縁起説が論じられています。縁起説は、あらゆるものがたがいに関係し合って成立する、という「^{そうえそうだい}相依相待」の考え。自然と人間とが「不一不異」である、という先ほどの例は、レンマ的な縁起を表し、独立した事物同士の〈原因—結果〉を想定するロゴス的な因果説とは、際立った対照を示します。午後の主題となる武道にとって、ロゴス的な因果とレンマ的な縁起は、どのような意義をもつのか。ここで先取的に示しておきましょう。

武道の立ち合いは、独立の主体同士が対戦する行為ですから、試合は当然のこととして、ロゴス的な因果関係に沿って進行する。技をかける側とかけられた側とは、能動・受動の関係に分かれ、技の巧拙によって勝負が決まる。勝利か敗北か、そこには紛れのない二元論的關係が成立すると考えられます。ところが武道の世界には、ロゴス的な因果だけでは説明のつかない、レンマ的な縁起の面が存在すると考えられる。かつてそのことを私に教えてくれたのは、合気道につうじる知人でした。その意見によれば、合気道を含めた武道一般について、技のかけ手と受け手との「一体不可分」な関係が存在する。その関係は、実戦よりも「型稽古」において、より顕著であるとのこと。「一体不可分」とは、どういうことか。対戦者が敵同士として相対するのではなく、たがいに協調して技を完成させるパートナーシップを実践する、そういうことを意味するように受けとれます。もしそうであるなら、武道の世界は、ロゴス的な因果だけではなく、レンマ的な縁起の領域でもある、ということになる。それがどういうことであるのかを、午後の「武道とレンマ」で、より具体的に追究することにしたいと存じます。

それに先立って、一点お断りを。これまで、『ロゴスとレンマ』に現れる「中の論理」にレンマを代表させてきましたが、ここからは〈中間〉に代えて、同じ意味をもつ〈あいだ〉を用いることにしたいと考えます。理由は、「中」を論理の問題から現実の問題に適用するには、〈あいだ〉を用いる方がふさわしいと考えられるからです。拙著の表題『〈あいだ〉を開く』は、環境問題はじめ現代世界の広範な領域に、「中の論理」を適用するために考案した苦心のフレーズです。〈あいだを閉ざす〉二元論に対抗して、〈あいだを開く〉非二元論的な「風土学」が、私によって立つ学問であることを、ここでお断りします——ちなみに、「風土」(milieu) はそれ自体、「中間」を表します。〈あいだ〉とは、語義「合処」(アヒド) が表すように、何かと何かの会(合)う〈出会いの場〉を意味します。その点に関して言えば、武道は相手を打倒し殺すことを目的とする戦闘技術としての martial arts ではなく、人と人が出会うことで成立する「道」の一つであり、〈型の文化〉を代表するものではないか。このような想定を前もってお示したうえで、午後のセッションに臨みたいと考えます。

II レンマと武道

1 武道における〈あいだ〉

「一体不可分」の関係

貴学武道学科には、武道として 8 つのコースが設置されているとのこと。まったく不案内で恐縮ながら、そのそれぞれにふさわしい「道」としての流儀、メソッドが実践されていることと存じます。それぞれの実技において、「敵」として戦う相手が想定されているはずです。対戦相手のいない武術は存在しない。この点は、西洋の **martial arts** も日本の武道も同じであると考えられます。人ならぬ的を射る弓術は、どうかといえば、戦場にいる敵を狙うのが元来のあり方であって、標的は生きた人間の代りであるという点において、人間同士が対峙する他の武術と本質は変わりません。では、西洋と日本とで異なる点は何か。それは、二元論というロゴスに立脚する西洋の武技が、自分と相手とを分ける主客対立的な関係を基本とするのに対して、武道の場合には、必ずしも二元対立的でない関係、自他が別々でありながら、同時に一体でもあるという関係、「不一不二」のレンマ的な関係を構成する、という点です。言い換えれば、武道においてレンマ的な〈あいだ〉が開かれている、それが西洋式武術と日本の武道との根本的な違いではないか、と考えられます。

実技につうじない私に、合気道の本質を伝授してくれた先述の知人は、過去に「木岡哲学塾」の一員として私の風土学に傾倒し、自分なりの「武道論」を披露してくれたことがあります。彼は、いま問題にしている〈あいだ〉に関して、注目すべきポイントを教えてくれました。それは、繰り返すなら、「技をかける者」(投げ)と「かけられる者」(受け)は、「技のかかり」において一体不可分なものとして結びつく、という事実の指摘です。敵と自分とが別々の主体として対峙する戦闘の場合、自他が「一体不可分」というような状態は、常識的には考えられません——ただ、そう言い切れるかどうか、自信はありません、対面的に戦う行為自体にレンマ的な意味がないのかどうかは、追究されるべき重大なテーマでしょう。

「投げ」と「受け」とを、能動と受動という反対の関係にとらえるなら、双方が一体であるというのは、不可解な話です。この点については、武道に携わっておられるみなさまから、証言をいただかなければなりません。「一体不可分」が、はたして実状に即した表現であるのかどうか、と。素人が口をはさむことはためらわれますが、この後に見せていただく予定の「型」(形)の動画は、技のかけ手と受け手とが、まさしく一体不可分のパートナーシップを発揮している、そういう実例ではないでしょうか。いや、それは「型」(形)であるからこその話で、実際の闘いは、倒すか倒されるか二択の関係である。だから、「型」と「実戦」の二つは、分けて考えなければならない。そういうご意見も、あろうかと思われます。

次に、私の考える〈かたちの論理〉をご紹介しますが、その前に、武道で重視される立ち合いの「呼吸」(間合い)について、ふれておきたいと存じます。ここにも、武道特有の〈あいだ〉が関係していると考えられるからです。

呼吸と〈あいだ〉

相手に合わせるのが、立ち合いのマナーです。武道に不案内の私でも、相撲を観戦するたびに、相手に合わせて立つ、という呼吸の妙にふれ、「不思議」の感を深くします。というのも、勝負を制するためには、相手と呼吸を合わせるよりも、自分のペースを優先する方が、得策だと思われるからです。ところが大相撲では、相手よりも先に突っかけたとたん、行事から「待った」がかけられ、仕切り直しとなる。奇妙ではありませんか。レスリングなら、相手より一瞬でも早くタックルに入ること、優位に立てるというのに。二つの競技の違いは、「道」に則して立ち会うべき武道か、ルールに従うことのみを求める闘技か、の違い。相手と呼吸を合わせ、正々堂々と立ち合うのが、「相撲道」であることは明らかです。

剣道の起こりは、命を懸けた技のやりとりです。勝負に負ければ、命がない。生涯60回以上立ち会って負けなかった宮本武蔵は、敵と呼吸を合わせることをしなかった。吉岡一門との果し合い、巖流島の決闘などでは、相手との〈間合い〉を外すことで勝ち、生き延びることができました。見ようによっては、道を外れた卑怯なふるまいによって、勝ち残ったとも言える。それでも、そういう人生の終わりになって、武蔵は「剣禅一如」の境地に到達して、『五輪書』を書き上げたという。いかにも日本的だと感じるのは、若き日、勝負に勝つことを我武者羅に追求しながら、勝負の世界を退いた老後は、「兵法の道」を説こうとした、その二面的な生き方です。どちらに武蔵の本領があると見るべきなのか——坂口安吾は、勝負にこだわった若き日の武蔵に「青春」の意味を見出しています（「青春論」）。勝負の格式や既存の型にこだわらない生き方が、武蔵の個性であった、と評価する立場です。

スポーツとしての闘技と「道」を求める日本の武術には、明確な違いがあると考えられます。勝つために手段を選ばなかったかのごとき武蔵の生き方は、「武道」という点から見て、どう評価すべきでしょうか。その剣術には、おそらく非二元論的なレンマの要素が、多く含まれていたはずですが、しかし、その反面、生き延びるという最大の目的のために、型にとらわれることのない合理的な思考・方法を徹底して実践した。そういう武蔵を、ロゴス的な論理を体現した人物、一種の「合理主義者」と見ることも、不可能ではないという気がします。武道そのものに不案内な輩の素人談義はこれまでとして、これより先の議論については、専門家であるみなさまのご教示を仰ぎたいと存じます。

ここから、Ⅱの後半のテーマ、〈かたち〉と〈かた〉の関係に入らせていただきます。

2 かたちの論理

〈かた〉と〈かたち〉

武道に関する「レンマの論理」は、〈かたちの論理〉である、と私は考えます。〈かたちの論理〉を自身のライフワークとして意識するようになってから、ほぼ20年が経ちます。この間、反省の成果を折々の著書に取り入れつつ、今日に至りました。このたび、松井先生か

ら思いがけないお招きに与ったことを機に、日本的な〈道の文化〉の中心に位置づけられる武道の理念、その中で「型」がもつ意味にふれてみたいと存じます——〈かたちの論理〉の全容については、いずれ一書を世に問う所存ですが、ここでは武道とレンマを結びつけるカギとなる部分に焦点を合わせます。

松井先生にお願いして、武道の型を演じる動画を二つご用意いただきました。

[動画映写2本]

二種の動画のうち、剣道については二人が立ち会い、もう一方の空手は一人が「形」(かた)を演じるというように、「形」の意味合いは種目ごとに異なることが判ります。まずは、剣道の場合。先に合気道の「投げ」(かけ手)と「受け」(受け手)の関係を挙げたように、二人の組む「形」の演武は、両者がそれぞれの役割を演じることによって成立する〈協働作業〉の趣を呈しています。実際の戦闘では、生死をかけて勝ち負けを争う二人が、「形」の実演にさいしては、協力し合うパートナーシップを実現するのです。形と実戦とでは、主体同士の果たす役割の意味が大きく異なる。このことは、〈型の文化〉である「道」の本質に關係する問題であると思われまゝ。

空手の場合、実戦は二人で争われるにもかかわらず、「形」は単独でも演じられます。剣道でも空手でも、「形」が「かた」と読まれる事実は、非常に大きな意味をもつように感じられます。あらゆる〈かた〉は、これから申し上げるように、〈かたち〉と結びついて成立する。〈かた〉と〈かたち〉とは、たがいに區別されながら、同時に一体でもある、という微妙な關係に立っています。前に申しあげた「不一不異」「不一不二」のレンマ的な關係性が、〈かた〉と〈かたち〉にはあるのです。ところが、剣道・空手における「形」は、〈かたち〉がそのまま〈かた〉を表すという考えを表します。ふつうの考え方では、〈かたち〉とは、個々人が演じる武技のさまざまなフォーム、姿のはずですが、そういう個人的な〈かたち〉が、そのまま空手のような武技の規範・典型としての〈かた〉でもある、という仕方で〈かたち〉と〈かた〉の區別が解消される。そういう意味での〈かたち=かた〉が一つの演目として立てられ、その演じ方に評点がつけられる。これは、空手が相手を打倒するリアルな闘争である以外に、型(形)を追究する〈道の文化〉でもある、という二面性を物語っています。以下、「道」が「型」と關係する点について、ごく簡単にふれておきます。

「道」——型の追究

〈かた〉と〈かたち〉の關係をざっと説明します。初心者は、師範の演じるお手本としての〈かた〉に従い、それを模倣反復することによって、技を修得していきます。その場合、一回一回の実技は、〈かた〉の域に到達しない未熟な試行の〈かたち〉であるけれども、反復練習をつうじて、徐々に〈かた〉が身についていく。そして、そういう修業が、諸段階を経ることによって、ついに〈かた〉を修得した、と師範によって認められたその時点で、いったん目標達成——「免許皆伝」——となる。これが修業の一般的な過程です。ここには、一つの〈かた〉からさまざまな個々の〈かたち〉が生まれるとともに、生み出された多様な

〈かたち〉が目標である〈かた〉に収斂していく、という双方向のプロセスが成立します。〈かた〉から〈かたち〉へ、という一方の動きが、〈かたち〉から〈かた〉へ、というもう一方の動きと呼応し合い、一体化して進んでいく。このように、〈かた〉と〈かたち〉とが、たがいに区別されながら、密接に関係しあい、ときに一つとなって、修業の目的を達成すること。これが〈かたちの論理〉であるということを、ひとまずご理解いただけたかと思えます。「免許皆伝」を口にしましたが、実を言えば、求道はそれで終わりではなく、いったん習得された型を否定する〈型崩し〉〈型破り〉によって、新たなステージに入ります。「求道」（修道）には、終わりが無いというのが、〈道の文化〉をしるしづける大きな特徴です。しかし、このような〈道〉の本質をめぐる追究については、いずれ別の機会を待ちたいと思います。

3 東西総合の地平へ

理論化の課題

〈かたちの論理〉を表現する〈道の文化〉は、日本社会に特徴的であり、それが西洋発のロゴスの論理では説明のつかないレンマ的論理であることを、武道の例をつうじてご理解いただけたかと存じます。門外漢の身を顧みることなく、武道とレンマの関係に立ち入るがごとき不作法を犯した主な理由は、日本の文化を代表する武道の意義を世界に向けて発信するためには、武道の本質に則した理論構築が必要不可欠である、という認識にあります。この認識は、私をお呼びくださった松井先生のお志にもつうじること、自分としては確信しております。最後に、武道の理論化にとって何が求められるか、いま考えつくかぎりの卑見を申し上げて終わりたいと存じます。

まずは、ロゴスとレンマとのしかるべき関連を具体化すること。本日のテーマ設定が示すとおり、本発表は、「武道とレンマ」の内的な関係を明らかにすることに意を注ぎました。二元論の合理主義をはみだす性格のレンマを、「非ロゴスの」な論理として、ロゴスの対極に位置づけたことは、ロゴスとレンマとを対立させたうえ、レンマをロゴスに代る地位につかせようと意図するものではないか。そのような印象を抱いた方が、おありかもしれません。しかし、そうではありません。ロゴス＝西洋、レンマ＝東洋として、双方を還元不可能な対立関係に立たせ、いずれを選ぶかを迫る単純な発想——世上よく見かけられます——をとるべきではありません。たしかに一面、レンマはロゴスでは捌くことの難しい非二元論的な事実を説明しますが、そのゆえにロゴスと〈対立する〉というよりも、ロゴスに欠落する一面を〈補う〉役割を担う、と見るのが妥当ではないか、と私は考えます。

山内得立の創案になるテトラレンマをよく眺めると、その定式自体がきわめてロゴスのである、という点に気がつきます——この点に関して、私は昨年、山内の具体化したレンマの論理を、「ロゴスの論理の〈修正版〉」とみなす解釈を提起しました（「中の論理」再考『関西大学文学論集』第73巻、第一・二合併号、2023年9月、32頁）。半世紀前、『ロゴ

スとレンマ』を世に問うた山内の真意は、ロゴス的な西洋哲学と、東洋思想を背骨とする日本・東洋の哲学、その双方を活かす「東西の論理的総合」をうちたてることにありました(『ロゴスとレンマ』「序」)。その意を汲むかぎり、武道のもつ近代スポーツとしてのロゴスの合理的側面と、〈道の文化〉に根差すレンマ的「非合理的」側面、そのいずれかではなく、両方を武道の理論構成に組み込むべきではないか。私はそう考えますが、いかがでしょうか。

結びに代えて

「東西の総合」といっても、さて具体的に何から手を着ければよいのか。口に出した当方でさえ、困惑を免れないというのが現状です。ただ、一介の素人として、さきほど例に挙げて説明したような、武道にとって本質的な問題を切り口とすることから、何らかの道が開かれるのではないかと思われまます。話の全体を振り返る意味で、もういちど二つのトピックを取り上げて、問題の所在を確認したいと存じます。

第一に、「呼吸」(間合い)の問題。武道における立ち合いは、二人の競技者が対面し、相手の呼吸に自分の呼吸を合わせることから始まります。その場合の「間」(ま)は、相撲の取り組みを例に挙げたように、コンマ何秒というような通常の時間の幅ではなく、測ることのできない瞬間的なタイミング、といった性格をもっています。それは、単なる時間の問題ではありません。先ほど引き合いに出した合気道通の知人は、私に向って、合気道の立ち合いを〈出会い〉に譬えたことがあります。その考えからすると、武道における立ち合いは、〈出会い〉の〈あいだ〉を開く行為である、ということになります。〈出会い〉という観点からすれば、勝負は、ライヴァルを打倒すべき行為である以外に、自他協力して〈出会い〉の場を開く共同行為であることになります。ロゴス的な争闘とレンマ的な協働、という矛盾が武道の根本にある。この事実のもつ意味が、解明されなければならないわけです。

第二に、「求道」の問題。これは、申し上げてきたとおり、私自身のライフワークとする〈かたちの論理〉に関係するテーマです。日本的な〈道の文化〉は、武道はじめ芸能や宗教などあらゆるジャンルにおいて、型を前提とし、かつ目標として営まれます——〈道の文化〉は、そのまま〈型の文化〉である、と申し上げたとおり。ここで余計な一言をさしはさむなら、現代のハイテク万能の世界に根本的に欠落するのは、型の思想であると考えます。ロゴス一辺倒の技術の世界に、レンマ的な〈かたちの論理〉を導入しなければならない。これが、哲学と長年付き合ってきた自身の、最後に果たすべき務めであると自覚しています。武道がそうであるように、型を追究する〈道〉は、〈かた〉と〈かたち〉とがたがいに媒介し合い、入れ替わってゆく無限のプロセス、すなわち「求道」を意味します。そのような求道の意義を、武道に携わる方々ご自身の言葉で語り明かしていただきたい。これが、抽象的な理論的反省に終始せざるをえない当方からの、たつてのお願いであることをご承知おきください。

以上二点、本セッションの最後に、当方からのお願いと申し上げる方が適当な、ご提案を述べさせていただきました。ありがとうございました。